

説明： およそ27年間に渡る真の宗教の探索。いかに彼女がイスラームを見出したか。

よりメリッサ リター

掲載日時 11 May 2015 - 編集日時 11 May 2015

カテゴリ： [記事](#) > [新改宗者ムスリムの逸話](#) > [女性](#)

私が育った家庭は、残念ながら家庭崩壊していました。父は反宗教的で、母は実践的な南部バプテスト派でした。父方の家族において、宗教は嘲笑の的であり、飲酒や薬物によって酩酊することが「真っ当」な人間とされました。母方の家族において、宗教は「理解された」ものではありませんでしたが、宗教的な会話は一切ありませんでした。母方の祖父は、一時は南部バプテスト派の聖職者でしたが、日曜の説教だけが信仰心を示す場でした。

幼少（9～10歳）の頃から、私は「教会へ行くこと」が好きになり始めました。夏休みには「両親の邪魔をしない限り」はバイブルスクールに通うことが許され、日曜日には「そこで温かい昼食が出る限り」は教会に通うことが許されました。そこでは“Jesus Loves Me”や“ This Little Light of Mine”などの歌を学びました。それは楽しく良い時でした。私が12歳になると、父は教会へ行くことを禁じてしまいました。日曜学校の授業は「真面目」になり過ぎていたのです。そこでは倫理について学び始めていました。飲酒はダメ、喫煙もダメ、薬物は絶対にダメ！

夫婦間に起きることにに関しては決して言及してもなりません。私はそうした倫理を家に持ち帰り、両親に啓蒙し始めました。それ以降、教会は禁止されてしまったのです。幸いにも、私はさらなる学びを欲する程度のことには学び終わっていました。

12歳の半ばに、両親が離婚しました。私は母と暮らし始め、その頃に真の宗教への探求が始まりました。私は毎週日曜日にペンテコステ派の教会に通うようになりました。そこでは、いかなる服装をすべきか（ズボンを履いたり、化粧をしたり、爪を切ることは許されませんでした）、そしていかに歌うかを学びました。また、いかにバイブルを引用すべきかや、いかにイエスを崇拝すべきか（神よ、私をお赦してください！）も学びました。そこでの「神の慈悲」の概念は興味をそそるもので、それは導きの探求における初めての本当に重要なレッスンでした。それは調べれば調べるほど根本的におかしな概念でした。その概念とは、私たちは既に救われており、何をしても地獄に行くことがない、というものでした。それはどう考えてもおかしなものでした。さらに、バイブルでは私たちの罪について言及されていません。そこには従うべき戒律というものがないのです。善行を促す励みというものがないのです。

私はその教会を去り、別の信仰を探し求めましたが、本能的に一神教にこだわりました。神こそが鍵であり、イエスがどこかに関わっているということ、私の魂は知っていました。私はユダヤ教を調べてみましたが、それがイエスを完全に除外しているという事実から、すぐさま見限りました。私はキリスト教の諸宗派も調べました。バプテスト派を検証したところ、そこには慈悲という概念そのものがありませんでした。何か間違ったことを行えば、救済や希望の余地なくすぐさま地獄行きなのです。カトリック派についても調べてみましたが、（マリア 神の慈悲が彼女にありますよう を含む）聖人への崇拝が腑に落ちませんでした。またメソジスト派と長老派からも、収穫はありませんでした。やがて、彼らが救済の

希望を説くという理由だけで、ペンテコステ派教会に戻ってしまいました。

私をいつも悩ませた2つの大きな疑問がありました。1つ目は、もしイエスが神の子ならば、いかにしてそれと同時に神であることができるのか、というものでした。2つ目に関しては1つ目と大きな違いはありません。もしイエスが神その御方ならば、彼がゲッセマネの庭園で祈っていた対象は一体誰だったのだろうか、というものです。私はこれらの疑問を牧師に伝えたところ、こう言われました。「そのような質問をするのであれば、信仰心の欠如から地獄へ堕ちてしまいますよ。」私は衝撃を受けました。ガリレオはこう述べています。「神は人間に感覚 理性 知性を授けておきながら、それらの活用の放棄を意図したなどということを私は信じない。」私はペンテコステ派教会を去り、2度と戻りませんでした。

19歳になると、私はモルモン教の2人の伝道師に家の戸を開きました。私は2人を家に招き入れ、勉強を始めました。これはなんて理にかなった宗教なのだろうと思いました。彼らは、イエスと神は同じ位格ではないと言いました。また、真の宗教においてひたむきに生きる人は天国の報奨を受け、重大な罪を犯した者でも、信仰心さえあれば一定期間の罰を受けるだけだと言いました。信仰者にとって、地獄は永久のものではないと言うのです。また預言者たちについても語り、モーゼが最後ではないと言いました。そして彼らはイエスを愛し、彼らの長兄であると見なしているものの、彼らの祈る対象は神であると言いました。それが真実であるかのように聞こえ、彼らの主張を気に入りました。私は彼らの教会に入会し、16年間メンバーであり続けました。

その16年間の内では、多くの困難を経験しました。そして何度も宗教の実践を完全に止めてしまったこともあります。私はアルコール中毒になり、そういった人たちのよくすることを行いました。そして夫と離婚し、様々な男性とデートし始めました。私は自分自身を貶めていたのです。ただ、信じる心は失ってはいませんでした。私はモルモン教が教えてくれたことを常に信じていました。私は自分の行いは清算されないものだと思い込まされてきました。地獄とは、信じない人々のためのものだということに安心しきっていたのです。罪人であれ、死後に精神的な煉獄に入れられ、そこで悔悟すれば天国に入ることができるのです。

その16年の間にも、悔い改めて教会に通い出したこともあります。モルモン教会ではレッスンを重ねていくと、部外者である「探索者」や新改宗者らには知らされないようなことを耳にするようになります。それはたしか2003年末か、2004年の初頭の頃でしたが、「神はどこかの惑星において人間の男性で、異なる神を崇拝していた」という話が私に「開示」されました。また、地球上のいかなる人間であれ、善行を積んだ者なら正当な神になることができるというものもありました。これには少し動揺しました。しかしながら、私にとってモルモン教はそれ以外では精神的にも論理的にも最も正しいのではないかと感じていた宗教でした。別の神々の概念は、他の何かを意味しているはずだと自分に言い聞かせました。ただし、その「他の何か」が何を意味しているのかは全く分かりませんでした。

2004年の5月、再婚後に再び離婚した後のある夜、インターネットで夜更かししていました。あるチャットルームを訪れて、素晴らしいエジプト人男性と出会いました。彼の名はサーミーでした。サーミーはとても親切で、いつも適切な議論を展開させていました。それは初めての体験だったため、いつもオンライン上で彼のことを探していました。私たちは彼の実家、私の実家、そして家族について話しました。私たちは将来に対する夢や希望についても語り合いました。また、神についての非常に一般的な概念の会話もしました。神についてはとても頻りに話していました。私は神における根本的な信条が彼と同じであることを見出しました。2004年の8月になると、結婚について話し合い始めました。その時、私は彼の宗教

であるイスラームについて調べ始めることにしたのです。

私は改宗するつもりは全くありませんでした。私はモルモン信者ではあったものの、結局はキリスト教徒だったのです。そこでは、イエスや聖霊を否定することが、直ちに破滅へとつながるのです。事実、私はそれが地獄に永遠に留まる唯一の理由であると確信していました。私はただ、彼の宗教を知ることによって、彼に不快感を与える事柄を避けることができるはずだと思っていただけでした。

サーミーは、イスラームについて学識のある友人のアフマドを紹介してくれました。彼は、私たちの関係が私に影響を与えるものであって欲しくはないと言いました。非常に多くの女性たちが、夫を満足させるためだけに改宗しています。私は神の特質について学び始めました。神は唯一であり、その被造物からは何ら必要としてはいないものの、あらゆる被造物は神を必要としているということ。また神は産みはせず、生まれもしないこと。そして神に似通うものは何一つないということ。それらの概念を受け入れることは容易でした。私の魂はそれらの情報に縋りつきました。しかし改宗するとなると話は別でした。イエスと聖霊の概念の問題があったのです。それらを否定することなど、到底無理でした。

それから、預言者たちについて学びました。すべての預言者たちは同等の存在であること、そしてムハンマド（神の慈悲と祝福あれ）が最後の預言者であること。またイエス（神の慈悲と祝福あれ）は神の子ではなく、預言者であったこと。それらについてはほとんど問題がなかったので、サーミーの友人はバイブルの中でイエス以外の預言者たちが「神の子」「神の唯一の子」「神の長男」と呼ばれている箇所を示してくれました。彼は他にも、イエス自身が弟子たちに対し、彼を神の子とは呼ばないよう戒めたこと、そしてイエスは自らを「人の子」と名乗っていたことを指摘しました。それによって私の問題の一部は解消されたのですが、モルモン教の預言者たちの問題が残されていました。その問題の解消は他よりも幾分か困難でしたが、最終的には類似点ではなく、相違点に着目することになりました。バイブルの預言者たちは全人類への共通した教えを携えており、その教えは常に一貫していました。つまり同位者なき神のみを崇めよ、というものです。

モルモン教の預言者たちの教えは、モルモン教会のみに対してのもので、それは通常、食物の貯蔵や自立心に関するものでした。それがひとたび指摘されると、私はどうして今までそこに気付かなかったのだろうかと思いに思いました。

同じような調子で、7ヶ月間に及び新たな学びや（モルモン教側の）根拠の反証がなされていきました。その期間でも、私は改宗などしないと言い張り、サーミーとアフマドも「分かっているよ」と言っていました。私はムハンマドへの啓示を含む、彼らの主張の根拠をバイブルから提示するよう要求し、彼らは実際にそれらを示してくれました。さらに彼らは、ムハンマドの名前が一時はバイブルの中にあったものの、それが後に編集され削除されたという事実も示しました。その名はアフマドで、ジョンとジャックが時に入れ替えて使用されるのと同じように、それはムハンマドと同等の名とされています。そしてその名は削除されているものの、それ以外の部分は残されています。ムハンマドに関してはイエス自身、そしてモーゼによっても予示されていました。

2005年の3月、私は（キリスト教による）地獄への恐れを解消し、心の底からイスラームを受け入れさせた最後のレッスンを習いました。それは聖霊についてでした。モルモン教徒として、私は聖霊の存在を否定したのであれば、ただちに永久の地獄が運命づけられるということを知っていました。何がどうあろうと、それに対する悔悟の余地はないのです。ありがたいことに、私にはそうした存在を否定する必要がないどころか、決して否定することな

どできないということが分かりました。私は「聖なる魂」としても知られる聖霊が、新旧約聖書において「主の魂」としても言及されていることを知ったのです。ここでも、彼らはバイブルからの典拠を出してくれました。それは誰でも知っている逸話です。主の魂がマリアに現れた、というものです。聖なる魂、あるいは主の魂は、天使ガブリエルに他ならなかったのです。そしてムスリムたちは天使たちの存在を信じています。神はガブリエルを介してムハンマドにクルアーンを啓示したのです。

翌日、私はあるオンライン上の友人と話し、彼女に改宗したい旨を伝えました。私はサーミーとアフマドにサプライズを用意したかったのです。彼女は現地のモスクに連絡してくれ、私のシャハーダの際に証人となってくれる2人のムスリム男性と1人のムスリム女性を私の家に向かわせる予定を入れてくれました。それはとても簡単でした。彼らはまず英語で信仰証言の意味を、そしてアラビア語の本文を教えてくださいました。それは「私は唯一なる神（アラビア語でアッラー）以外には神はなく、ムハンマドはその使徒であると証言する」といものです。ムスリム女性は私に最初のスカーフ（ヒジャーブ）をくれ、それを改宗の証として被せてくれました。

その夜、私はオンライン上でいつものようにサーミーとアフマドに会いました。彼らは2人とも改宗の事実を非常に喜んでくれましたが、驚いてはいませんでした。そのとき、以前私が「改宗などしない」と言っていた時、なぜ彼らがいつも「分かっているよ」と答えていたのかを知りました。つまり、ムスリムとは自らの意思を神の御意に服従する者のことをいいます。あらゆる子どもたちはそうした服従の状態です。両親や環境といった外的な要因によってそうした状態から引き離されてしまいます。それでも、私たちの魂は「神の御顔」を請い求め、服従の状態に立ち返ります。私の魂は1978年にその探求を始め、2005年の3月、34歳にして遂に回帰したのです。いわゆる「改宗」をしたものではありません。

さらに、私は改宗した直後にそれまでのあらゆる行いが精算されました。そこには善行を促す励みがあります。神は全知全能なのです。サーミーと私は2005年の7月に結婚し、彼が私にイスラームを教えるという責務を引き継ぎました。学ぶべきことは、常にあります。

この記事のウェブアドレス：

<http://www.islamreligion.com/jp/articles/2472>

Copyright © 2006-2013 www.IslamReligion.com. All rights reserved.